
卒業試験 ~ A desperate graduation examination ~ @死神っ

2 乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命懸けの卒業試験 ｝ A d e s p e r a t e g r a d u a t
i o n e x a m i n a t i o n ｝ @死神っ

【Nコード】

N 9 6 9 6 M

【作者名】

2 乗

【あらすじ】

「初めまして！！ ご主人！！」 そう言って、死神だと言い張る少女は突然窓を突き破って入ってきたんです！！ その上、何だかよく分からないバトルロワイアルに強制参加！！ 美少女やつほーいなのは良いけど、頼むからそんな怖い顔で、俺の命を狙わないで！！ 超はちゃめちゃ、完全ネタ小説！！

第0話 とんでもないプロローグ（前書き）

少しモンハンとは書き方を変えています。

モンハンとは違い、面倒な情景描写を抜いてありますので、思い浮かべながら読んで貰えると幸いですw

って言うか、息抜きのもりで書いたのに結構考えてたり…。

ではでは、始まるよー

第0話 とんでもないプロローグ

「あつ、初めまして！！ ご主人！！」
「……」

それはそれは、未だ寒さの残る2月の事。

「えっと、もしかして驚いてくれたりします!？」
「……」

突然、女の子が窓を突き破って入ってきた。

「わはー」
「声も出ない位、驚いてくれてるんですね!! 嬉しいな」
「……」

その女の子は、背中に黒い翼を持ち、手に大きな鎌を持ち…。

「あつ、実は私ですね。死神なんですよー」
「……」

拳句、自分の事を死神と言い張っている。

「聞いてます? ご主人？」
「……」

何故か俺の事を「主人」と呼ぶその子。
ショートの金髪に目鼻立ちの整った顔。美少女と呼ぶには申し分

ない。

「返事して下さいよー……」
「……」

服装は上下とも、何があったかは知らないがボロボロの黒い布を纏っている。

あつ、もしかして正装？

「うう……」
「……」

身長は150cm位と小柄。

「よし！！ 殺す！！」
「……」

それでもって、殺すだの何だのと言っている訳だが……。ん？ 殺す？

『ブォン！！』

「えっ……！？」

風を切って、呻る銀の刃。

徐に少女が振り下ろした鎌は、俺の肩から脇腹にかけてを袈裟切り。

見事、体を半分こ。

驚きの声を上げる暇も無かった。

「ああああ！！ 大丈夫ですか！？ ご主人！？」

「……」

勿論2分割の俺に、その問いに回答出来る訳がない。

そして、大丈夫なわけもない。

それでもって、何という自作自演…。ある意味尊敬するよ…。

「今くっ付けますからね！！」

「……」

くっ付くのか…？ いや、俺がそんな事考えられる訳も無く…。

「しっかりして下さいよお、ご主人…！！ それじゃあ私、卒業試験落っこちちゃいますよお…！！」

「ちょー！！ 揺するな揺するな！！ 中身が出るっ…！！」

何事も無かったかのように、くっ付いてしまった…。何コレ怖い…。

そして卒業試験？ 何の話か全くわからない。

「あの…、どちら様で？」

俺は恐る恐る聞く。だって、目の前にいるのは新手の殺人犯か、強硬派のゲリラ。

いや、今時どんな強硬派も昼間に窓ガラスは突き破らないだろう…？ 多分。

その少女は俺の質問を聞いて暫く戸惑っていたが、突然閃いたように手を叩き、嬉しそうに答えるのだった。

「あっ！！ 私ですか？ 私は…」

そう。そんな感じで勝手に始まったんだ。前代未聞の、卒業試験が…。

第1話 俺と死神と契約と 〱 傍迷惑な卒業試験〱 (前書き)

いつも通り、2話目ですが第1話。

第1話 俺と死神と契約と 〳 傍迷惑な卒業試験〵

「おつはよー」つざいまーす」 「じゅじーん」
「……おはよ」

朝です。清々しい朝です。

そんな2月半ばの冷え込む朝に、目の前の死神さんは黒い薄手のボロボロなローブ一枚で、俺から布団を引っぺがします。

寒くない子は良いねー…。

「ありやりや？ テンション低いですよー？ 挨拶はいつも元気良
くつて、『人間界の薦め』って本に書いてありましたよー？」
「朝からそんなハイテンションに、付いていきませんっ…。」

何度もいいいます。朝です。それも太陽が昇り始めた、緋色の空を
擁するような時間帯です。

えっ…。殺す気ですか？

「ほらご主人！！ いつまでも布団に包まれていないで、一日の始
まりに感謝して、今日も元気にいきましよう！！」
「何…？ その新手的宗教みたいなの…？」

時間帯を具体的に言えば5時半…。2月なのに、何故もう明る
いの…？ 自然が俺に冷たい…。

「人間界の一日の始まりはヤク。トなんでしょー？ 飲んでファイ
ト一発です！！」

「何かいろいろ間違えてるよ！？ 文化的な事と、鷲のマークの大

○製菓的な事と!!」

とか何とか言いつつ、「はいっ!!」と彼女に差し出されたヤ。ルトを手に取り、眠い目を擦りながら一気に飲み干す。

何も入っていない胃に、ヤク。トが流れ込む。……凄い不快。

「ふぉー……。始まりましたねー」一日が」

「そうか……？　なんだか人生終わってる感じがしてるんだが……」

俺の横で、俺の一日諸共ヤ。ルトで勝手に始める少女。朝の紅い空に、その黒い翼はよく映える……。

そんな事はどうでもいい……。どうしてこうなった……。まあ、聞いたところで答えられる奴は居ないだろう。

「あつ、駄目ですよー？　ご主人には死なれちゃ困るんですからっ」
「お前の私事に付き合う俺の身にもなってくれないかな？」

そう。死ねないんです。頼まれても死ぬ気は、更々無いですけど。

「きつとお互い利益がありますってー」
「具体的に其れを教えてくれるかな……？」

話の流れはこうだ。

ψ

「私、シエルって言います」
「シエルさん……」

窓から冬の身を切るような冷気が入り込む中、その少女はちゃっ

かりコタツに潜り込み幸せそうに顔を緩めながら話し出した。

ああ。今思えば、なんてシユールな光景なんだろう。

「ご主人？ お名前は？」

「えっ？ ああ。御崎悠二みさきゆうじだけど…」

しかし、名前を聞いた当の本人は「まあ、名前でお呼びする事はないですけどねー」と一蹴。

何だこの子？

「あのー…。シエルさん？」

「いやいや、シエルで良いですよご主人」

「えっ…まあ…。シエル？ ご主人っていうのは…？」

名前を呼んだ事で満足したのか、シエルは嬉しそうにニッコリと笑った。そしてそのまま、コタツの上の籠に積まれたミカンに手を伸ばし、皮を剥き始める。

「えーとですね。簡単に言うと、暫くの間お力を貸して頂くパートナーの事です」

「はい？」

待って。意味が分からない。パートナー？ 力を貸す？ 何に対して、俺は何をすればいいの？

しかし、当のシエルはミカンを一口に含め、美味しそうに顔を綻ばせている。何だか凄い寛がれているのが…。ってか、この状況を受け止めている自分に腹が立つ…。

「簡単ですよ？ ちょっと卒業試験のお手伝いをして貰いたいんです」

「そ…？ 卒業試験…？」
「はいつ…！」

シエルは満面の笑みで即答した。
卒業試験？ 勉強を教えるんだろうか？ 俺が死神（？）に？
何の勉強？

取り合えず、そういうのは内容によるよな。

「何を教えれば良いのかな？」
「ふえ？ 教える？」

シエルは首をかしげる。俺からは汗が噴出す…。
何だろう？ すごく…。いや、ものすごく嫌な予感がする。
こついつのアニメとかで見たことあるぞ…？ この後、間違いなく
面倒に…。

「あー。卒業試験は勉強とかじゃなくて、バトルロワイアルなんで
すよー」

「ばとるろわいある…？」

「あれえ？ 意味分からなかったですか？」

「いや…。それ、一種の殺し合いだよね？」

「あー！！ もうその例えビンゴですね！！ 流石ご主人！！」

ビンゴだそうだ。やべえ…。凄い手が震えてる。

「はれ？ ご主人？ 寒いんですか？ まあ、窓割れちゃってます
しねー」。

「誰が割ったと思ってんだ…！？」

いやいやいやー！！ 今はもう窓なんてどーでもいいの境地…！！

全力でこのフラグを回収して放棄しなければ、確実に死への階段を一段飛ばしでGOな感じた。

しかし、シエルはどんな話を進める。

「卒業試験はですねー。人間と死神がペアを組んで、他の死神と戦って、勝者が試験合格っていう単純なルールなんです」

「あれ？ 窓の件放置！？ そんなでもって、もう俺やる雰囲気なの！？」

「えっ？ もう契約しちゃいましたし…」
「いつの間に！？」

シエルは「あれえ？」と困ったように笑う。笑えない俺がいるのは、既に言うまでもないだろう。

そして人生最大の危機回避ならずっ！！ コマンド上から『逃げる』の選択肢紛失の件について…。

「早い話が、さっき半分こになっちゃった時に、治すのにご主人は死神との契約を交わしたんです。よくある話ですよ。と言うより、じゃないと普通くつつきませんからねー」

「くつつきませんからねー」じゃねええええええ！！ 明らかかな強制行為だよね！？ 事後承諾とか、そんなんじゃないよね！？ むしろ詐欺だよね！？」

汚い！！ 流石死神！！ 汚い！！

手口が悪質過ぎて、回避のしようがない…。というか、卒業試験で毎年あるんだろうから、毎年俺みたいな悪質な手口に引っかかる奴がいるのか…。

アーメン…。

「其れもこれも、ご主人が半分こになっちゃうからじゃないですか

「」

「なっちゃったんじゃないよ！！ お前がしたんだよ！！」

「でも、交わした契約は守って貰わないと…。魂取って、冥界に安置する事になりますよ？」

「完全に選択肢が『死』か『死』になってるよね！？ どっちにしても死亡フラグしか見えないんだけど！？」

選択肢は2択。今死ぬか、後で死ぬか。うわぁ…人生最大の2択。出来れば生か死かで2択を取って欲しかったよ…。

「まあまあ、落ち着いてくださいご主人」

「この状態で落ち着けて…悪魔か？」

「うんにゃ？ 死神ですよ？」

「どっちでも良いわ！！」

「むむ…。ちよつと癪ですけどいいです…。我慢します…。それで？ どうします？ 死にます？」

「まさかコタツでミカン食べてる女の子に、『死にます？』って聞かれると思ってなかったよ…」

「あー。シニールですね」

「お前が言うか？」

「生かすか殺すか決められる当人ですから」

さて。さて。さて。此処は従っておいたほうが利巧かな…？ ないと明日の新聞の紙面を大きく飾る事になるよな…。

『マンションで男性が変死体で発見』 ……ヤダナー。

「分かった…。やる…」

「なんか無理やりで悪いですねーご主人」

「本当にそう思ってる子は、こんな事しません！！」

「えへへ…。まあまあ、そう怒らずに…ね？」

シエルは、いくつ目かも定かではないミカンに手を伸ばす。……
反省の色が見えてこないのは俺だけだろうか？

「では、さらつと説明しますね？」

「そんな軽いもんじゃないと思うんだが……」

「だいじょーぶですよご主人！！ パートナーを信じて下さいっ！
！」

「心配が加速する……」

無い胸を張るシエルに俺は苦笑を浮かべつつ、籠のミカンに手を伸ばす。しかし、その前に壁が立ちはだかった……。

「めっ！！」

「うおおっ！？」

突然、俺の指擦れ擦れに鎌が振り下ろされる。鎌はコタツに「ビ
イイン……」と金属の振動音を響かせる。

一生に一度見るか見ないかの……いや、見ない光景だ。

「ご主人と在られる方でも、おミカンは渡しませんっ」

「分かった！！ 分かったから鎌仕舞えっ！！」

シエルは「まったく……」と小さく呟くと、鎌をどうやってか小さなキーホルダーに変えて、ロープに仕舞う。

あー。最近のドラ。もんの道具って、あんな感じのもあるんだ……。

「この卒業試験ですが、言った通りのバトルロワイアル形式です」
「えっと……。取り敢えず勝てば合格で、負ければ落第？」

「簡単に言えば、そうですね？」
「……？」

人にお預け出しといて、目の前でミカンを幸せそうに食べるシエル。

……襲ってやろうかとか、考えなくも無い。……いや、そんな死と直結した思考は今直ぐ捨て去るべきだな。うん。

「この試験は少々バトルロイヤルルールが複雑で……」
「と言うと……？」

「人と死神の二人一組を基準として、相手のパートナーである人を殺せば勝利です。逆もまた然りー」

「凄い単調で分かり易いルールだね！？ しかも人に厳しい！！」

シエルは、「あれ？ そうですねー？」と何の気にも掛からない様子。そりゃ自分は安全だもんね！？ 別段困らないよね！？

「まあ、でも一人狩っただけじゃ合格は貰えないんですよ……」
「狩る……。ん……何だ？ 二、三人か？」

シエルはミカンを剥きながら、めんどくさそうに一言。

「7人ですよー」
「ドラゴ。ボー。！？」

大体なんでも『7』に合わせりや良いってもんじゃない！！ ラッキー7だなんて、今回は通用しない。人7人狩ってラッキーとか言えねえよ！？

「ラッキー……」

「言つな!! 言つな!!」

俺は全力で、シエルの一言を止める。じゃないと、仏様に死後何て言われるか分かったもんじゃない…。

「むう…。まあ簡単な話が、7人死神のパートナー殺して、7人分の魂を集めて初めて合格なんです」

「えっ? と言う事は、一回死んだら其れっきり?」

「あー。魂取られちゃったら終わりですね」

天使の笑顔を持った悪魔が、コタツでミカン食ってる…。俺も一生に一度しか、こんな光景見ないと思うよ? 馬路で。

「その上、他人の集めたのを横取りするのも許されてます」

「人道に反する行為だな…」

「死神ですからね」

納得しそうな俺がいる。いや、待つて? そもそもこんな意味の分からない試験に、俺は参加しなきゃいけないのか!? 詐欺で!?

「まあまあご主人」

「ん…?」

「ゆっくり集めましょう」

「ゆっくり…って、期限は決まってないのか?」

「今日から、一年間ですよー」

籠のミカンが消滅。食って眠くなつたのか、シエルは卓上に顔を突っ伏す。

スゲエ殴りてえ…。

「じゃあ、がんばりましょーね。ご主人♪」

「……え」

「あっ！！ 因みに一年以内に集められなかったら、ご主人は強制的に上級死神さんに殺されますから、気をつけて下さい！！」

「何！？ その手厚い対応！？」

今日から一年間は、なにやら毎日死と隣り合わせの生活…。緊張感というか何というか…。

取り敢えず、窓の隙間風が寒いです。

ψ

「ご主人！！ 良いですねー朝！！ 心が顕れますねー！！」
「毎日同じ事思うが、死神が口にする言葉とは思えないな…」

そして、今日に至る。

ここ一週間…。毎日こんな感じで朝を迎える。

正直な話、絶対に身が持ちそうに無い…。まあ、その内飽きるでしょう。

ミカンと同様に。

「じーしゅーじん」

「へ？」

上機嫌で俺の手を取るシエル。その手は朝の寒さからか、随分温もりがあるように思えた。

「えへへ…」

「なっ…！！ なんだよ…！！」

シエルはそのまま『ぎゅっ』と手を握る。

これは…。いいシチュエーションじゃないのか！？ 良いぞ！！
グッドなフラグの匂いがするぞ！！

「お腹空きましたあ…」

「はい…？」

「朝ご飯にしましょ…？」

いつの間にか明るい日が昇ってくる。

「おまつ…！！ 何で！？ 何で！？」

「ふえ！？ 何がですかあ！？ お腹空いただけですよあ…！！
ねえってばー！！ ごーしゅーじーん！！」

「分かった！！ 分かったから！！ あっ！！ こら！！ くっ付
くな！！」

まあ…、今日はこれからです。

第1話 俺と死神と契約と 〱 傍迷惑な卒業試験〱 (後書き)

モンハンに比べて文字数を少なくしました。

読みやすいようにですねw

まあ、モンハンは今まで通り、文字を羅列します。

設定が混沌としてるのでw

第2話 「死神ぱうぁー」とかいう鬱陶しいモノ、理不尽は最高の褒め言葉

長らく更新していませんでしたが、始まりますw

第2話 「死神ぱうぁー」とかいう鬱陶しいモノゝ理不尽は最高の褒め言葉ゝ

俺は気が付く。

何に気がつくか。

単純明快、猿でも分かる話だ。

「親に何て言えばいいんだ…」

「ほ？ どうしたんですご主人？」

俺は1階へと延びる階段を眼下に見下ろしながら、それを1段も下りずに立ち止まる。

そう。

この下には、我が両親が美味しい朝ごはんの支度中。

「うっはー…。若しかして、階段降りるのが怖いんですか？」

「突き落とすぞデメエ」

俺の後ろで、人を小馬鹿にしたような声がする。

そう。

この自称「死神」の、アブナイ女の子こそ、今朝俺が抱える1番

の問題点。

「あつ、若しかして余り話数間隔空けたせいで、ヤクルトの件が『どこでヤクルト飲んだしwww』っていう状況になっていることに、今気がついたとか?」

「台詞なげえ!! 確かにそれ思ったけど、それ今そんなに気にする事でもないよね!？」

その辺はきつと他人の事情だ。そつとしておいてやろう。

しかし困った。

突然、朝っぱらから息子が少女と一緒に、パジャマ姿で降りてきたとでもなれば、母さんが卒倒してしまふやもしれん。

その上鬱陶しいことに、死神のシエルは薄いローブ一枚ときた。

間違いなく、逮捕だ。逮捕。

「……」

「ふえ?」

俺は背後に立つ、無垢な少女をガン見。

別に、いやらしい気持じゃなくて、自己防衛本能の顕れ。

シエルは俺をキョトンとした顔で見つめる。

「……」

「ご主人…？ あんまり見ないで下さいよう…」

俺の理性が危うく崩壊しそうになる。

KENZENな高校生に、金髪美少女は堪える。そりゃもう、眩しすぎて。

「もう…。可愛いなあ…」

「ふえっ…！！ そんな…！！ カワイイだなんて…！！」

シエルは慌てて、手をばたつかせて恥ずかしがる。

なんとも純粋な反応だが…。

『ドンッ！！』

「へっ…？」

シエルの手が、俺を突き飛ばす。

俺の視界が天井を向き、そしてそのままイナバウアーからブリッジのコンボ。

しかし、ブリッジの軸となる手は、地を掴むことは無かった。

『ドガガガガガガガガ！！』

「もう…ってうあああああ！！ ごしゅじiiiiiiiiん！？」

シエルの目に映るのは、数メートル下で生涯最高数の打撃コンボをくらって、堕ちた俺。

頭から落ちたせいで、廊下には真つ赤な薔薇が誇らしく咲いている。

階段はまさに赤い絨毯。

「ちょー！！生きてますかー！？」

勿論、生きているかは別として、俺には意識がない。

「お父様ー！！ お母様ー！！ 大変ですー！！」

かすかに聞こえたシエルの叫ぶ声。助けを求める声。

親父とお袋が、「どうしたどうした」と興味本意に走ってくる。

……あれ？

「どうしたのシエルちゃん…ってあら？」

「お母様！！ 御免なさい！！ 床を汚してしまつて…」

……あれ？

「床は拭けば大丈夫。シエルちゃんは、向こうでテレビでも見てな

「さい」

「はい…。お父様…」

……あれ？

「もう…この子ったら…、床をこんなにして…」

「全くだ。あとで、きちんと言っておかなきゃな」

……そろそろいいよね？

俺はあまりの理不尽さと、おかしすぎるシエルへの対応に、無理を圧して体を起こした。

肋骨とか、間違いなく砕けてる。

「えっと、お袋？」

「ああもう！！ 起きたんなら、アンタ早く床拭きなさい！！ ほら、雑巾持って！！」

えっ…いや、そうじゃなくて…。

「オヤジ…？」

「全く…、休日の朝から、お前は どうして そうなんだ！！」

えっ…？ あれ？ 俺の期待してた反応と違う…。

「えっ…、ちょー！！ 待つてよ！！ ねえ！！」

オヤジとお袋は、俺に雑巾を持たせ一言叱ると、何事も無かったかのように居間に戻る。

残された俺は、ポツンと独り。

「……」

可笑しくないか？

「何がですか？ ご主人？」

「うぉあ！！ ビックリした…って違う違う！！ 全部！！ 全部おかしいの！！」

シエルはキョトンとして、俺を見つめる。

ああ、もう！！ 可愛いなあ、チクショー！！

「どこがです？」

「いやいやいやいや！！ しらばくれるつもりか！？ おかしいだろ！？ 何であんなに、うちの両親とフレンドリーなのさ！？」

シエルは何を言われているのか分からない様子だったが、少し間をおいて、ポンと手を叩き「理解」ポーズを見せた。

「いや、ほら。死神ですし」

「納得いかねえ！！」

俺の叫びに呼応するように、居間の方から「うるさいぞ！！」と

俺は紛れもない、赤い液体を指さして言う。

シエルはまた。

………にっこりと笑うのだ。

「ヤクルトです」

「ヤクルトおおおおおおおおお！？」

朝はまだ長い。

第2話 「死神ぱうぁー」とかいう鬱陶しいモノ、理不尽は最高の褒め言葉

さて、息抜き調子でいきたいと思いますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9696m/>

命懸けの卒業試験 ~ A desperate graduation examination ~ @死神っ

2011年7月24日13時58分発行